校長通信（教職員版）第8号　２０１７．２．２４

私立の進学校 - 高槻中学校・高等学校の

「アクティブ・ラーニング公開研究会」に行ってきました！ - その２

【３】研究会に参加して・・・（続き）

（３）第二部―全体会

第一部の公開授業及び振り返りが終わり、会議室に集まり全体会が始まりました。校長の挨拶のあと、生徒の発表です。

中学１年生の生徒は、「総合学習」の研究発表。「葭簀（よしず）における断熱効果」について、夏休みに研究したことを発表していました。中学１年生はまだ１３歳。多くの教師、それも初めて出会う教師の前での発表ですから、相当緊張していましたが、それでも本校の生徒のように原稿を見て発表するということはしていません。ちゃんと前を見て発表していました。

２番手は、SGHの取り組みの発表です。高校１年生の生徒です。テーマは肥満についての研究発表。プレゼンのスライドも発表も全て英語です。それも１０分あまりの時間、原稿も見ずに聴衆に向かって英語でプレゼンです。圧巻でしたね。それもJapanese　Englishの発音ではないので、何を言っているのかが聞き取りやすいのです。知らない英単語もたびたび出てきましたので、私はスマホで調べながら聞いていました。私は以前、あるSSHの発表を観に行ったことがあります。彼らの発表も冒頭のテーマについては、英語です。その時は、「すごいな・・・」と感心していましたが、この高槻高校の発表を見せられると、それも色褪せてしまいます。

最後は、高校２年生のSSHの発表。この生徒はとてもユニークでした。冒頭、「私の発表は、豪華二本立てですので、決して退屈させませんのでご期待ください」から始まります。見た目は、小柄でいかにも「理系オタク！」という感じの生徒なのですが、緊張なんてどこにもなく、流ちょうに最後までプレゼンテーションし終わりました。大阪薬科大学で大学の先生にかなりお世話になって、大学生とも長時間にわたり実験を続けたということで、この研究をきっかけに「将来やりたいことを見つけることが出来ました」と締めくくっていました。

京都大学松下先生

さて、このあと関西大学の森朋子先生、京都大学の松下佳代先生と高槻高校にアドバイザーとして関わっておられる教授の報告です。「大学の先生に深く関わってもらえるのって、いいよな･･･」と思いながら話を聞いていました。火曜日に高槻高校の校長に電話して、「アドバイザー費用っていくらぐらいなのですか？」と聞いてみました。直接お会いして話してもいないのに、丁寧に話をしてもらいました。実は、１回の来校に関わる費用は「５万円＋交通費」です。これは、大阪府の謝礼規定と同じでした。これなら、学校マネジメント予算で何とかなるかもしれません。来年は、大学の先生を招いてＡＬの研修を行えればと考えています。なぜかというと、ＡＬは教育技術の改善という範疇を大きく超える教育観の「コペルニクス的転換」と言えるからです。きちんとした理論の裏付けがなければ、前の校長通信で示したような「ＡＬってグループワークでしょう？そんなことしている時間なんて無いわよ。」という偏見を克服できませんし、ＡＬを実践していても、「深い学び」につながっていかないのです。

そこで、なぜＡＬなのか？という問題を、現代をどのように捉えるかという側面と教育学からの側面からアプローチしていきたいと思います。これを押さえながら、お二人の報告を行っていきたいと思います。

【4】なぜＡＬか？・・・「後期近代」という捉え方から

一度、この「後期近代」という捉え方を紹介したと思いますが、私の言葉ではなく様々な学者・識者の言葉を引用して紹介したいと思います。

まず、「資本主義の終焉と歴史の危機」を書かれた水野和夫氏からの引用です。著書の「はじめに－資本主義が死ぬとき」から引用しました。「後期近代」を端的に現している文章です。

> 資本主義の死期が近づいているのではないか。
> その理由は本書全体を通じて明らかにしていくつもりですが、端的に言うならば、もはや地球上のどこにもフロンティアが残されていないからです。
> 資本主義は「中心」と「周辺」から構成され、「周辺」つまり、いわゆるフロンティアを広げることによって「中心」が利潤率を高め、資本の自己増殖を推進していくシステムです。
> 「アフリカのグローバリゼーション」が叫ばれている現在、地理的な市場拡大は最終局面に入っていると言っていいでしょう。もう地理的なフロンティアは残っていません。
> また、金融・資本市場を見ても、各国の証券取引所は株式の高速取引化を進め、百万分の一秒、あるいは一億分の一秒で取引ができるようなシステム投資をして競争しています。このことは、「電子・金融空間」のなかでも、時間を切り刻み、一億分の一秒単位で投資しなければ利潤をあげることができないことをしめしているのです。
> 日本を筆頭にアメリカやユーロ圏でも政策金利はおおむねゼロ、１０年国債利回りも超低金利となり、いよいよその資本の自己増殖が不可能になってきている。
> つまり、「地理的・物的空間（実物投資空間）」からも「電子・金融空間」からも利潤をあげることができなくなってきているのです。資本主義を資本が自己増殖するプロセスであると捉えれば、そのプロセスである資本主義が終わりに近づきつつあることがわかります。
> さらにもっと重要な点は、中間層が資本主義を支持する理由がなくなってきていることです。自分を貧困層に落としてしまうかもしれない資本主義を維持しようというインセンティブがもはや生じないのです。こうした現実を直視するならば、資本主義が遠くない将来に終わりを迎えることは、必然的な出来事だとさえ言えるはずです。
> 資本主義の終わりの始まり。この「歴史の危機」から目をそらし、対症療法にすぎない政策を打ち続ける国は、この先、大きな痛手を負うはずです。（２０１４年「資本主義の終焉と歴史の危機」はじめにより）

水野氏が述べているように、「資本主義の死が近づいているのか」。それは私にはわかりません。しかしながら、皆さんの実感も含めて確実に言えることは、「資本主義がうまく機能していない」ということではないでしょうか？その時代の事を「後期近代」という言葉、もしくは『ポスト近代』という言葉で表現します。

水野氏の指摘する「資本主義の死」が「民主主義をバックボーンとする資本主義の死」を意味するかもしれません。この冒頭の指摘にあるように「中間層が資本主義を支持する理由がなくなった」が故に、イギリスのＥＵ離脱が起こり、世界の多数の予想を裏切りトランプ大統領が誕生したのですから。この行きつく先には、保護主義の台頭があり、民主主義を破壊していく暴力的な資本主義が生まれるかもしれません。

少し話が横道に逸れてしまいました。このように「行き詰った資本主義」の様相を端的に現す言葉として

VUCA

があります。

Volatility － 変動性　　Uncertainty － 不確実性
Complexity － 複雑性　　Ambiguity － 曖昧性

の頭文字です。

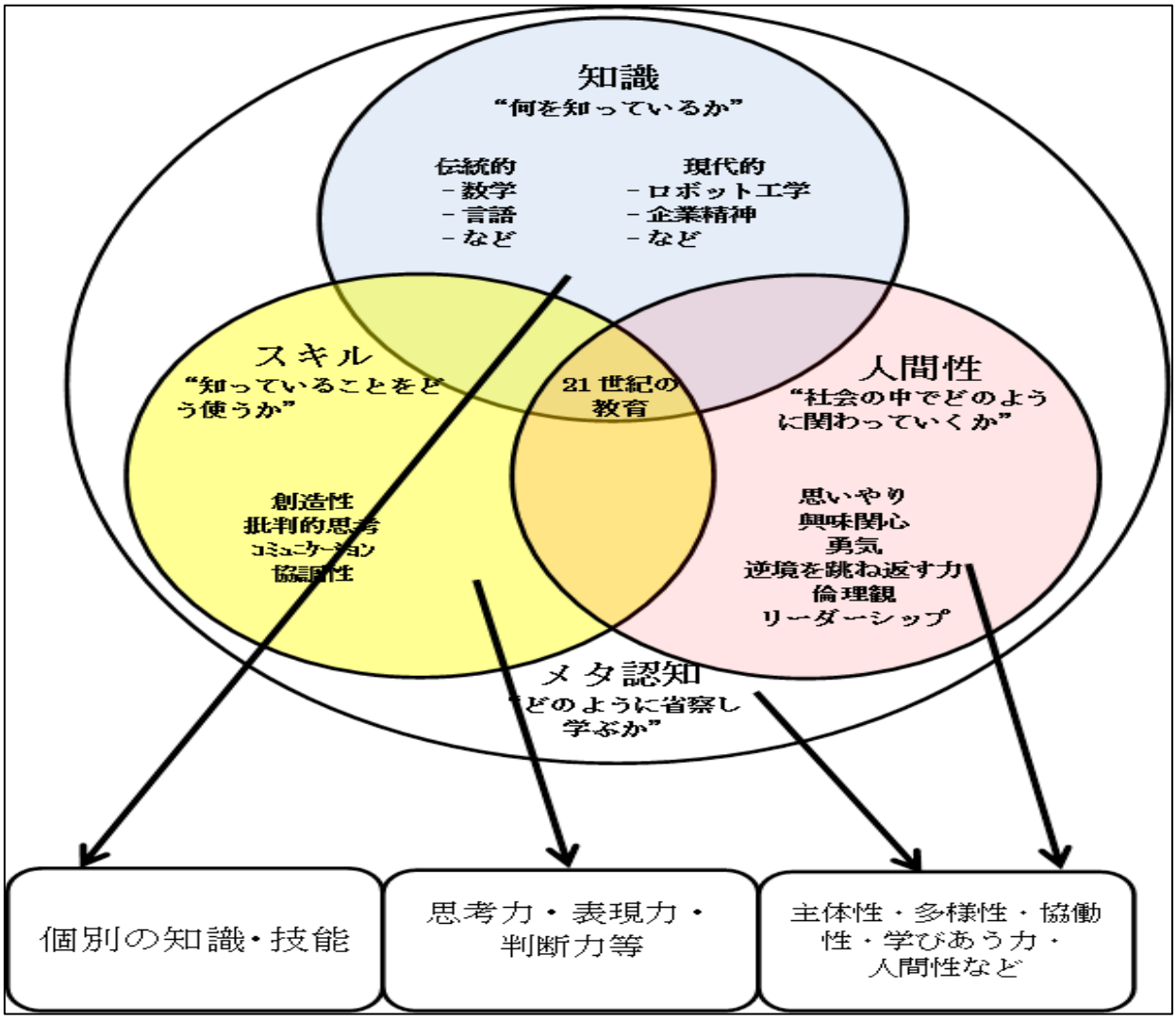
左の図は、松下先生も使っておられた図です。要するに、資本主

義がうまく機能していた高度経済成長のような時代ではなくなってしまって、「先が見えない時代」「成功モデルが確信できない」時代になってしまったわけです。

高度経済成長の時代では、そのシステムに「乗っかれば、成功する、勝ち組になる」と思われていました。だから、そのシステムに乗っかる力が求められたのです。これを藤原和博氏は「情報処理能力」と言っています。与えられたマニュアルをより正確に、よりスピーディーにこなす力です。だから、私も含め高度経済成長世代は、算数のテストでは、速くできた人、満点取れた人が評価されていました。ちょっと疑問に思ったり、「なぜこうなるのだろう？」と考えることは、軽視されていた、少なくとも重視されていなかったように思います。

ところが、資本主義が社会主義に勝利した後に、猛烈な市場原理主義（レーガノミクスとかサッチャーリズムと言われました）が推進され、それがグローバリズムの名のもとに、この市場原理主義が世界中に広がったのです。その結果が、水野氏の言う「フロンティアの消失」に結びついてしまい、いまや資本主義自体が行き詰ったのです。

そして今、この「後期近代」を生き抜くために求められる力が、「情報処理力」だけではだめだと、世界中の学者が気づきました。その学力観を示したのが次の図です。



この図は、松下先生が講演の中で使っておられた図をわかりやすいように私が加工した図です。資料は、私が以前に紹介した「21 世紀の学習者と教育の４つの次元」の本の学力観を図式化したもの（４つの円）に現在進められている学習指導要領の改訂の学力観を照合させたもので、出典は、

「２０３０年に向けた教育の在り方に関する第2回日本・ＯＥＣＤ政策対話（報告）」

です。今私たちは、授業では「知識―何を知っているのか」の伝統的な知識を中心に教えています。そして行事やクラブや生徒指導、クラス活動などで人間性を育てているように思っています。が、それもどこまで自覚しているでしょうか。そして、スキルやメタ認知についてはほとんど手付かずです。それではだめだと、世界の至る所で模索されている新しい学力観が上の図なのです。この学力観を如何に実践していくかという観点で、ＡＬが

語られているのです。

私が通っている兵庫教育大学の大学院でこの冬にフィンランドに研修に行くインターンシップが実施されました。私が夏にタイに行ったのと同じ、もう一つの研修です。この研修にも行きたかったのですが、費用と日程が合いませんでした。フィンランドに行ってきた院生の報告を聞いていると、フィンランドで行っている教育は、授業時間数も多くない、宿題も少ないのだそうです。だけど、フィンランドの教育水準が高いのは、まさに「メタ学習ー学び方の学習」を教えているためで、自分で主体的に学んでいるからだと実感したと院生が言っていました。左は沖縄の今帰仁村で教育長をされている新城氏が撮影されたフィンランドの小学校の授業の様子。机の並び方から日本と違いますよね。

ＡＬが単に教育技術にとどまるものではなく、21 世紀を生き抜く人材育成の観点から語られていることがわかって頂きましたか？

さらに、日本の特殊事情を加えましょう。それは超少子高齢社会および人口減少社会の到来です。人口が減少しても経済力は維持できるというような論調もありますが、問題は「働き世代の人口減少が顕著」という事なのです。この問題を解決するために安倍政権は、「一億総活躍社会」というスローガンを打ち出しました。この少子高齢化、人口減少に対応し、日本の経済力・国力を維持するためには、一人一人の能力を最大限に発揮することが必要なわけです。単に、組織のトップだけが頭脳になり、あとはその指示に従う手足であっては、生産力が向上しない。何が問題であるかを発見し、自分の頭で考え、解決策を見つけ、チーム力で解決する人材、そんな人材が求められている。そのためのＡＬでもあります。

さらに付け加えれば、それをグローバリズムの中で実施しなければならない過酷さです。国内の競争ではなく、国際的な熾烈な競争の中で勝ち抜いていかなければならない。それが、道上氏が「日本エリートはズレている」で語った実態なのです。

さて、ここで、違う識者に登場してもらいましょう。学生と会社のトランジションを専門に研究されている東大の中原淳先生です。先生は、ご自身の研究テーマからもＡＬの重要性を感じ、この度「アクティブ・ラーナーを育てる高校」という本を出版されました。その本の冒頭「なぜ、今、高校でアクティブ・ラーニングなのか？」というところで、次のように述べられています。

> どんなに入試に成功しても、教育機関での偏差値は企業規模までしか予測しません。それ以降、どのように生きて、どのような仕事人生をおくれるかは、「いかに学べるか」とセットになるのです。
>
> 解くべき問題は誰も与えてくれません。変化の早い社会では、何が解くべき問題かを見定め、多くの人々と協力し、彼らを巻き込みながら、革新的な知識・技術をつくりあげていくことが、今まで以上に求められます。アクティブ・ラーニングとは「よく働き、よく学び、よく生きるため術」なのです。それは「教育機関の一時期の流行」ではないのです。
>
> 私にとってアクティブ・ラーニングとは、「働き、食べていく智慧や術」を伝えることです。それは他者とガチで討論する経験、人を巻き込み何かを成し遂げる経験、社会で意味のあると思われる課題解決をやり切る経験。そうした経験ベースの学習から成立します。ぜひ、そうした時間を、高校や大学から、なるべく「前倒し」して経験してほしいと、思います。

「なぜ今、ＡＬなのか？」わかって頂きましたでしょうか？今回も紙面が足りなくなりました。次回に教育学の立場からＡＬの必要性を紹介したいと思います。